

山口が喫煙所で煙草に火をつけようとしたときに、施設から支給されたPHSの電話が鳴った。電話の相手は二階職員の塚本だった。電話の内容はショートステイで短期間施設に入所している利用者の小早川さんが介護長と話がしたいとのことだった。山口は煙草を早めに切り上げて二階に向かった。

山口が二階のサービスステーションに入ると、山口に内線を掛けた塚本がいた。

「塚本さん、小早川さんは何処にいるの」

「忙しいところ呼び出してしまいすみませんでした」

「いや、いいんだ。で、何処にいるの」

塚本が廊下の先を指した。「二〇七号室です」

「ありがとう」山口は二〇七号室に向かって歩き出した。しかし、すぐに足を止めて塚本に向かって振り返った。「なぜ俺を」

塚本は両肩をすくめた。「さあ」

山口が二〇七号室のドアをロックすると、ドアが静かに開いた。山口を一人の女性利用者が出迎えた。背丈は一六〇センチ弱、グレーヘアはベリーショートで艶があり、清潔感を醸し出している。背筋を伸ばし、両手は腹部の前で軽く組み、足は左足を少し前に出し、右足は左足の踵あたりに付けている。山口も反射的に背筋を伸ばした。

「初めまして、山口義雄といいます」見覚えのある顔だったが、思い出せなかった。

「小早川京子です」彼女はそう言うとお辞儀をした。その動きは自然と雅やかな趣を見せていた。「どうぞ中へ」

山口は部屋に入ると、壁際にある箆笥の上に置かれているいくつかのフォトスタンドが目に入った。中に納まっている写真すべてに人が写っていた。山口はきっと家族の写真だろうと思った。そして写真は壁にも掛けられていた。その写真は箆笥に置かれたものより大きく、真鍮製と思われる金の額縁で囲まれ目立っていた。山口は壁の写真を凝視した。その写真には男女の姿が写り、男性は軍人が着る黒い礼服を身に付けた姿で立っていた。そして胸にはたくさんの勲章が付き、見た者に威厳を感じさせていた。女性は男性の前で椅子に座っている。白い洋装の礼服を身にまとっていた。写真は白黒だが、山口にはその白は間違いなく鮮やかな白であろうと確信していた。二人の顔に笑顔はない。しかしその表情には悲しみや不安は微塵も感じられない。二人とも毅然とした表情で誇りすら感じられた。そして山口はその写真に映る二人から幸せを感じられた。

「どうぞ」小早川は山口に椅子を勧めた。

山口は椅子に座った。「私に会いたいと聞きましたが」

「紅茶に砂糖は入れます？」

「はい？」

「お呼び立てしたのに、何のおもてなしもしないのは失礼にあたりますわ」

山口は礼を言った。「砂糖はなしでお願いします」

小早川は紅茶を差し出した。「本当ならティーカップでお渡ししたいけど、施設じゃ仕方ないわね」

山口はプラスチック製のコップに入った紅茶を受け取った。「私に何か聞きたいことでもあるのですか」山口はあらためて尋ねた。

「あなたに聞きたいことがないとお会いできないのかしら」小早川は紅茶を一口飲んだ。

「いえ、そんなことはありません」

小早川はコップをサイドテーブルに置いた。「私がここを利用している理由はご存じ」

山口は首を横に振った。

「娘のためよ。私は月に二回、それぞれ一週間くらいの期間でここに泊まっています」

山口は小早川を見ながら紅茶を飲んだ。見た感じ、介護が必要な状態には見えない。

「私が常に介護が必要に見えるかしら」小早川は山口の思いに答えるかのように言った。

「そう感じられません。もしかして要支援状態」

要支援状態とは国が介護保険サービスを利用する基準（要支援一・二及び要介護一から五の七段階で構成されている）のひとつであり、要支援一、二はある程度自力で日常生活が可能な状態である。

「要支援一。まだまだ身の回りのことは自分でできるわ。でもね」小早川は紅茶を一口飲んだあとに話を続けた。「娘はとても心配性でね。私を一人にさせないのよ。もし何かあったら、てね」苦笑いを浮かべながら顔を横に振った。「どこも行かず、いつも家にいて私のそばを離れない。自分の時間も作らないで……可愛そうな子」

愛されているな。山口はこの親子が互いに強い想いを持っていると感じ取った。「もしかして、ご自分からショートステイを希望されたのですか」

「あの子には自分の時間が必要よ。私のそばから離れ、ショッピングや散歩、喫茶店でゆっくりとコーヒーを飲む時間。私がここにいる間、自分の時間を有効に使いながら過ごしてもらいたい。あの子には必要なこと」

山口はうなずいた。親子の強い絆を感じられた。

山口は壁に掛かっている柱時計に気がついた。大きさは小振りだが、ダークブラウンの色調で周りに真鍮飾りがしつこくない程度で施されていた。金色の振り子が静かに規則正しく動いている。「珍しい」山口は呟いた。こんな時計を設置するなんて。

「ドイツ製よ」

「え、もしかして小早川さんの時計ですか」山口は驚きを隠さず言った。

「いつも自宅から持ってきているの。持っていきたいとお願いしたら職員さんは快く手伝ってくれたわ。そんな大きくもないし」

「なぜこの柱時計を持参されるのですか」

小早川は時計に顔を向けた。「この時計は父から戴いた物。結婚のお祝いにね。父が私と夫が新しい人生を歩む門出として、新たな時を刻み続けてくれるために贈られた私の大切な時計」小早川の目が愛しいものを見つめるような優しさを醸し出していた。

山口はあらためて柱時計に目をやった。振り子がゆっくりと振れている。きっと時を知らせる音は柔らかく温かみのある音だろう。この柱時計は、休むことなく動き、様々な時代の時を刻んでいた。小早川さんもこの柱時計のようにこれまで生きた時代の記憶を心に刻み込んでいるはずだ。

山口はなぜ呼ばれたのか未だに分からなかった。「小早川さん、もう一度お聞きますが、なぜ私を呼んだのですか」

「静かな部屋で一人紅茶を飲むと落ち着きます。時には音楽を聴いたり、本を読んだりしてね。でもたまには誰かとお話ししながら紅茶を飲みたくなるものよ」小早川はコップを手を取った。「あなたを見かけたのはつい最近、その前は見かけたことはなかった。あなたは資格をお持ちなの、確か介護士」

「はい、介護福祉士です。それと細かいことですが介護士ではありません。介護士という名称は存在しません。略語だと思うのですが、私は好きではありません。略してしまうと、福祉が抜けてしまいます。福祉が抜けてしまうことに恐怖を感じます」

「あなたはその名前に誇りを持ってらっしゃるのね。あなたにとってその名前は自分自身を奮い立たせるもの。その名前が自分の信念を貫き通す原動力の一つになっているよね」

山口はゆっくりとうなずいた。「介護職全体の責任者として、ここで働くことになりました。よく見えていますね」

「ここで生活している人達は、見ること、聞くこと以外やることがないの。あなた達が私

達を見るようにね」

「皆さんをしっかりと見ることは私達の仕事です」

「それは少し違うわ。あなた達は見ているけど、見ていない」小早川は紅茶を口にした。

「どういうことでしょうか」

「あなた達は私達のことを、利用者という対象で見ているだけ。それは」小早川は紅茶をサイドテーブルに置いた。「利用者という表面だけを見ているだけ。あとは持っている病気とか障害を見ているだけ。それはまさに仕事目線よね。そして一方通行、私達は常に促され、従っている」

山口は不意打ちを食らったような感覚に陥った。一方通行、その言葉を聞いて介護の未完成を感じた。山口は返す言葉が見つからなかった。

「私達もあなた達のことを見ているわよ。そしてあなた達の会話もじっと聞いているの。あなた達は私達がそばにいるのに、気にもせず私達のことを喋っている。時には聞きたくないことも耳に入ってくる」

「利用者の方を傷つけるような」

小早川はゆっくりと頷いた。「私達がそばにいるのに利用者の悪口を言うなんて。怒りより呆れ果てて何も言えないわ」

「それに対して何も言わないのですか」

「あなた達がよく言う、クレームってこと」

「ええ」

小早川はしばらく山口を見つめたあとに言った。「山口さん、私達のことをもっとよく知りなさい。それと」小早川は笑顔を見せた。「出された紅茶を飲みなさい」

山口は紅茶を飲んだ。口にした紅茶はすでに冷め始めていた。

「私達は我慢を教え込まれて育ってきたの」小早川は一呼吸置いて、再び話し始めた。「大東亜戦争により我慢することが骨の髄まで染み込んでいるの。おかしいと思っても我慢が優先してしまい、何も言わず、目立たず、じっと我慢する。それが戦争を経験した私達」

小早川は紅茶が入っているプラスチック製のコップを持った。「こんなコップに入った紅茶を美味しいと感じられるかしら。でも私達の世代は我慢してしまうの」小早川はゆっくりと一口飲んだ。「私達の世代は、あなたが想像できない我慢を経験しているのよ。当時は我慢というより、それが当たり前のこととして親から教え込まれたわ。この言葉知っているかしら。贅沢は敵だ。欲しがりません勝つまでは。麦を食べても戦地にお米」

「たしか戦時下の標語だったと」

小早川はゆっくりうなずいた。「お国のため、天皇陛下のため」小早川は山口の目をじっと見つめながら言った。「そんな時代。そして我慢するのが普通だった時代。だってそうでしょ、兵隊さんがお国のために命を賭けて戦地で戦っているのよ。そんな時にお腹が空いた、もっと美味しいものが食べたいなんて言える？ お国のために我慢することが当たり前であり、それが国民の務めであったわ」小早川の声と表情は凜としていた。

山口は小早川を見て思った。彼女から出る凜々しさは、おそらく戦時中、貧困の苦しさを弱音一つ吐くことを決してしなかった時の自分が、今でも変わらずにでているのであろう。骨の髄までか……。

「それに」小早川は話を続けた。「天皇陛下が雪は黒いと言え、私達国民も雪は黒なんだと思っ込んでいたのよ。違ふと考へちゃいけないの。どう、想像できる」

「雪は黒色、それを自分に言い聞かせたわけですか」

小早川は笑みを浮かべた。「そう、その通り。誰が見たって雪は白。でも天皇陛下、もしくはお国が言うなら雪は黒、とね」

「でもそれは事実じゃない」

小早川は紅茶を一口飲んだ。「そう、雪は白。それは厳然たる事実。しかし事実の捉え方はその時代、世情によって左右されるのも事実。今の時代だったら言えるでしょう、事実じゃないと。しかし、あの頃はそれを言ったら、非国民と指をさされるのも事実。今では想像できないでしょうけど、当時は当然のこととして教え込まれ、教えられた私達も何の疑問も持たなかったのも事実……そんな時代」そう言うと再び紅茶を口にした。「それにもう一つあなたにお伝えするわ」

「もう一つ？」

「お国が右向け右と言ったら国民は黙って右を向く。そんな時代で育った私達は自分の意思は二の次」

「と言うと」

「以前こんなことがあったの」小早川は話し始めた。「ここの施設が近くのレストランに私達を連れて行ってくれたわ。確か和食専門のレストランで綺麗な作りをした店よ。私達がテーブルにつくと一緒に来た職員がメニューを見せて、何を食べますかと利用者に聞いたわ。その利用者はどう答えたと思う」

山口は何も言わず、両肩をすくめて首を横に振った。

「皆さんと一緒にいい。そう答えたの。すると職員は分かりましたと言い、会話を終わりにしたわ」小早川は一呼吸おいて言った。「どう思いますか」

山口はしばらく考えたあとに言った。「皆さんと一緒に、これは真意じゃない」

「そう、その通り。私達は自分の気持ちを素直に言える環境では育たなかった。自分の意思を伝える前に周りに合わせてしまう自分があるの。我慢する世代、いいこと、私達はそのまま成長し今に至っていることを忘れず、しっかりと意識してくださいね」

「生きてきた時代背景」

小早川はゆっくりとうなずいた。「そこからその人の気持ち、真意を導き出しなさい。もしあなたがメニューを見せて皆さんと同じでいいと言われてたらどうします」

山口は頭の中でストーリーを考えた。「例えば」

「例えば？」

「もう一度メニューを見せ、この中であなたの好きなものを聞くかも」

「聞いてどうします」

「周りに合わすことなく、自分の好きなものを食べていいんだ。そのことを感じさせます」

「では、今の職員さん達はどうでしょう、そこまで考えてくれるのかしら。メニューを見せて、あたかも希望を聞いているかのようにだけど、本音ではない言葉を鵜呑みにして事を進めてしまう。これでは、あなたたちの介護は単なる職員さんの自己満足になってしまうかもね。それにあなた一人が出来ても意味はないわよ」

しばらく小早川は山口を見つめ、静寂が部屋を包み込んだ。

山口は小早川の言葉に対して異を唱えることができなかった。彼女の言うとおりのだ。介護はチームで利用者を支援する。そして支援に関わる介護職員の皆が統一したケアを提供しなければならない。私はできる、それではチームケアは成立しない。チームの皆ができてこそチームケアだ。

「いいこと」小早川が念を押すように話し始めた。「私達が自分の意思を心にしまいこまず、解放させるようにするのがあなた達の役割ですよ。それには相手をよく理解することが肝心ね」

山口は紅茶を一口飲んだ。

「相手を理解することで、もう一つ」小早川は床頭台の引き出しを開け、一枚のCDを取り出した。「ちょっと待ってて」そのCDをCDラジカセにセッティングした。再生ボタン

を押すと、椅子に座り直した。「これを聴いて」

二人は曲が始まるのを待った。すぐに曲が始まった。その曲は中島みゆきの「地上の星」だった。

「聴いたことあるかしら」

「ええ、中島みゆきですね」

「曲目はご存じ？」

山口はうなずいた。「地上の星」

「そう、私のお気に入りの曲」

二人はしばらくの間、言葉を交わさず、曲を聴いていた。

山口は曲を聴きながら小早川を見つめていた。彼女は目を閉じ、聴き入っている。彼女が言った相手を理解するためにもう一つと、この曲と何の関連があるのだろうか。

地上の星の曲が終わると、小早川はCDラジカセに近づき、曲を止めた。「この曲の意味を私なりに考えたの」そう言いながら椅子に戻った。「私達が思う星って、夜空に輝いている星よね」

山口はゆっくりと頷いた。

「人で言えば輝いている人、注目される人達、有名人や憧れの人、いわばスターね。歌詞にこうあるわ。人は空ばかり見てる。これって、私達は星のように輝く有名人、スターばかりを見てる。そう言えないかしら。私の言っていること、分かります」

山口はうなずいた。

「でもね」小早川は身を乗り出し、強い口調で言った。「スター、星は空だけじゃなく私達の足もと、地上にも大勢いるのよ。ただ私達はそれに気がつかないだけ。映画やテレビだって教えてくれないスター達」小早川は背もたれにもたれかかった。そして意味ありげな笑みを浮かべながら言った。「さあ、私が思うスターとは一体誰のことか分かるかしら」

「話の流れからしてみれば、利用者、高齢者に焦点を当てている気がします」

「今では高齢者となり、そのなかには施設に入所している方もいます。今の日本がここまで成長したのは彼らのお陰、自然の成り行きでなったわけじゃありません。戦後の焼け野原から立ち上がり、不屈の精神でがむしゃらに働き、この日本を復活させた人達のお陰です。彼らこそが地上の星よ」

「それは団塊の世代」

「彼らを甘く見ない方がいいわよ。日本を復活させた強い自負をもっている」

二人の間に沈黙が流れた。

やがて山口が言った。「このような話を職員に聞かせたのは私が始めてですか」

小早川の表情に笑みが浮かんできた。「言ったでしょ、私達はあなた達の言動をずっと見聞きしているのよ。当然あなたのことね。あなたを見た。あなたの言葉を聞いた。結果、あなたに伝えることが必然になったの。あなたがこの施設に来たのも偶然じゃない。運命かもね」小早川はゆっくりと立ち上がった。「楽しい時間でしたわ」

山口も立ち上がった。「ありがとうございます。私もとてもいい時間を過ごせました」山口が礼を言い、部屋から出ようとしたとき、小早川に呼び止められた。

「地上の星達は我慢をしないわ、私のようにね。言いたいことを言うし、行動に移す世代。さあ、大変よ。我慢して本音を言えない利用者と我慢せずに本音を吐き出す利用者、両方を受け止めなきゃいけない。今の若者からしてみれば、それぞれ扱いにくいかもね」

「恐らく」

「大変でしょうけど、それがあなた達、介護福祉士の役割。見る、ではないのよ、見つめ合いなさい。会話をしなさい。それができなければ、介護福祉士の名前から福祉を消しなさい」

山口は口元に笑みを浮かべた。「紅茶、有り難うございました」

「お礼なんか言わないで。こんなの私にとっては、おもてなしのうちに入らないわ。私の自宅にいらっしゃい。本当のおもてなしを見せてあげるわ」

山口は小早川に一礼して部屋を出て行った。山口は小早川に引き込まれていく感覚を覚えていた。山口は本気でおもてなしを受けて見たいと思った。一体どんな家なのだろうか、きっと彼女にふさわしい家なのだろう。

山口は小早川が言った言葉を思い出し、足を止めた。見つめ合うことができなければ介護福祉士から福祉を抜きなさい。「まったくだ」そう言うと再び歩き出した。